
star history

くらうど

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

star history

【Nコード】

N4743X

【作者名】

くじらじゅん

【あらすじ】

病気で母を失い、父もほとんど家にいないため主人公『神内 彰』じんないあきらは、高校三年生になってもまだ、将来を考えることができないでいた。

だが、彰には一つだけ好きな事があった。

それは星をみることである、彰は毎日この田舎町で一番高い丘の上から星を見るのが日課であった。

ある時いつものように丘に登るとそこには美しい少女がいた。

それから大きく彰の人生が変わっていく・・・

初めて書いた小説ですので、誤字脱字またそれ以前の問題も多々あると思いますが温かい目で見守っていただいて、意見や感想をいただけるとう嬉しいです。

プロローグ

『ねえ、お母さんあの星はなんていうの？』

まだ、小学校低学年ぐらいであろう子が横にいる綺麗な女の人に問いかける

『あれはね、金星っていうのよ』

と優しい声で男の子に答える。そこから、しばらく二人は静かに星を眺めていると、突然

『あなたはね、こんな星のきれいな夜に生まれてきたのよ。』
と少年にまたあの優しい声で呟いた。

『だからね、私は死んでもあのあなたが生まれた時のようなきれいな空の星になってあなたを見守っているから強く生きてね。』

そう言うのと、綺麗な女の人は立ち上がり一人で闇の中へと、歩いていく。

少年がその後をおっているけれど、どれだけ走っても追いつく事は出来なかった。

少年は足を滑らして顔から泥だらけになった状態で叫んだ。

『待つてよ、お母さぁん！』

バ！つと彰は目が覚める

『また、あの夢か・・・』

ためいきをつきながら言い時計をみると大切にしているアナログ時計の針はすでに8時15分を指していた。

やべえええ！遅刻じゃねーか！

急いで制服に腕を通し、食パンを片手に

『いつてきまーす』と返事の返ってくるはずもない家に挨拶をしてバイトをしたお金をためて買った、マウンテンバイクにまたがり家を出た。

ここから、学校まではほとんど下りだから、

肩をきる風が気持ちいい。

だが、それも今日が新学期で、しかも遅刻しかけではなかったらの話だが……

そう思いにふけていると前から突然、80才ぐらいであろうおばあさんが歩いてきた。

咄嗟にハンドルをきり、避けた先には川があり案の定マウンテンバイクは大破、自分は川の中で浮かぶ魚である。

今日は完璧に遅刻だな……

呑気な事を考えながら見る空はどこまでも広がっていた。

第一話 出会い

壊れたマウンテンバイクを押して学校につくと、案の定体育館で始業式が始まっていた。

さあどうやってはれずに入るか・・・

そんなことを考えていると

『おい、神内いゝおはよー』

と後ろから、だれかがバカみたいに叫びながら走ってくる。

『おい、静かにしろ桜井！』

と言うと、不思議そうな顔をして

『え？なんでだよ？朝はあいさつするもんなんだぜ？』

当然といった顔でたつ桜井の後ろには

『ほう、三年の初日から遅刻してなおかつ、こんな所で仲良く雑談とはな。』

と生活指導の鬼島オニジマが笑いながら言った。

いや、お前が笑うと逆に怖いって

横では、何故ばれたああ！？とか言ってるバカがいる。

この後初日から学校中の掃除をさせられたのは言うまでもない。

あと紹介が遅れたがこいつは

『桜井 翔馬ハヤシロ』言動からもわかる通り、超がつくほどのバカだ。

なんでこの高校に入れたのかはわからないが本人曰く『俺が実力をだせばこんなものさ』らしいが俺はいまでもまともに入ったのではないと思っっている。

掃除を終え学校を出ると、すでに辺りは真っ暗になっていた。

今日も丘にちよつと寄っていくか・・・

と思い、マウンテンバイクにまたがろうと思ったが胴体と前タイヤだけを残したものに忘れていた絶望感を覚え、仕方なく歩いて丘に行くことにした。

丘というのは、この田舎町で一番高い場所の事を言う。

いつも人気はなく、夜の町の風景が美しいわけでもなかったが、その分星がとてもきれいだっただ。

彰は夜になると、この丘の上で星をみるのが日課であった。今日もいつもと同じように丘に通じる階段を登り終えると、そこには月の光りに照らされた、誰がみてもおもはず息をのむような美少女がいた。

その少女は、長い髪をなびかせながらこっちへくると

『この場所には、よく来るんですか？』

とその美しい容姿によくあつた綺麗な声でこう質問してきた。

『ま、まあ、よ、よく来るかな？』

まさか、話しかけられるとは思わず声が裏返ってしまった

その少女はクスリと笑うと

『そうなんですか、ではあなたは・・・』

と含みのある言い方をしたので

『な、な、なんですか？』

やはり声が裏返ってしまう。

『いえ、なんでもありません、私はそろそろ帰りますね』

とすこしお辞儀をしながら言うつと、

『では、さよなら、また会えたら会いましょう』

といい、急ぎ足で帰って行ってしまった。

名前ぐらい聞けば良かったなあ、

と思いつつ

さっきの含みのある言い方はなんだったんだろう？

と思いつつ、いつもと同じような満天の星空を眺めていた。

第一話 出会い（後書き）

文章力もなく、話も底が薄いでしょうが、なにとぞ初心者ですので
意見や感想や、いけないところの指摘などもしていただくと
嬉しいです。

第二話 奇跡(?)

ジリリリリ!!・・・パチ!

時計を止めるとまだ7時半であった。

今日は間に合うな。

そう心のなかで思うと、トースト焼いて食べながら今日の天気テレビを見た。

その後家から『歩いて』学校へとゆっくり歩きながら行った。

下駄箱に着き靴を履き替えようとすると

ゴン!!

後頭部に強い衝撃を受け意識がとびそうになり、なにごとだと後ろを振り返ると

『ごめんね、彰やりすぎちゃった』

いきなり、頭をかばんで殴ったこいつは・・・

『なにしてんだ、葵』

こいつの名前は『長瀬 葵』ながせあおい小学校からの知り合いで、顔は学校で

もトップクラスなのだが、暴力的な所があり面食いとDM(?)から多大な支持を得ている。

『いや、だつて背中から黒いオーラが出てたから励まそうと思って励ますために人を気絶させようとするのか、こいつは・・・』

そう思ったが口にだすとさらにややこしくなりそうなので、あえて言わなかった。

『はあもういい、俺は教室にいくからお前も自分の教室へ行け』

といったが、その前に昨日掃除をさせてたから自分の教室がわからない。

『なにいつてんの?あなたとあたしはいっしょのクラスだよ』

と、髪の毛をてぐしで、ときながら言った。

なんだつて!?

そう思いながらも冷静を保ち

『じゃあクラスにいこうぜ』
と言った。

そうすると、

『え〜こんな所でデートの誘いなんて恥ずかしいよお』
後ろでバカなこといつてるやつは放っておこう

そう考えながら教室へ向かった。

教室につくと、自分の席が指定されていたのでそこにすわった。

田舎町の高校なので、三クラスしかなく新しいクラスメイトもだいたい一度は同じクラスになったことがあるやつばかりだった。

そして、やはり俺は運が悪いのか桜井も同じクラスであった。

だが、あいつはこの時間には絶対にこない

昨日少し遅れた程度で来たのも、奇跡のようなものだ。

まあ来るとしても昼休みぐらいであろう。

そんなことを考えていると、先生が来て朝礼が始まった。

余談だが、担任は二年、一年ともに同じである。

担任が教壇に立つと、いきなり

『今日からこの学校に転校してきた子がいる』

と言うと、クラス中がざわめきに包まれた。

『静かに！ では北沢 玲奈さんきたなわかれい入ってください』

そう言われると、髪の毛長い美少女が教室に入ってきた。

クラスの男子が全員騒ぐ中、彰だけが困惑を隠しきれない表情であった。

その美少女は一礼すると

『北沢玲奈です、短い間ですがよろしくお願いいたします。』
と、簡単なあいさつをする

『では、北沢さんはあの神内ってやつの隣の席に座ってくれ』
と言った。

北沢は彰の横に座ると

『よろしくお願ひしますね』

優しい笑顔でいい、

『また丘にいきましようね』

と小声で付け加えた。

やはり間違いではなかった。この少女いや北沢は丘にいた美少女だった。

第三話 困惑

何が起こっているんだ？

彰は頭をフル回転させ考えた。

昨日あつた美少女は実は同じ歳で、しかも同じ学校に転校してきただど？

困惑している彰を見て北沢はまたあの夜のようにクスリと笑うと

『まさか、同じ学校だったなんて驚きました。世の中にはこんな事があるんですね』

と、驚きもせず言ってるのを前の席の男子Aが聞いて

『てめえ北沢さんと知り合いなのか!？』

と叫びそうするとクラス中の男子が次々と叫び大変なことになってしまった。

『あらあら賑やかですね』

とのんびりした声で言った。

いや、主にお前のせいなんだがな

と思ったがそんなこと言えるはずもなくこの騒動は先生の手によって止められた。

まあ後で男子にかこまれて尋問されるはめになったわけだが。

キーンコーンカーンコーン・・・

やっと昼休みになった。

『なあ神内、食堂いこうぜ』

『おう・・・ってなんでお前がいる?』

四時間目おわるまでは確実にいなかったはずなのだが

『やだなあ、そりゃ学生だからに決まってるんだろ』

と、エッヘンとゆわんはかりのいきおいで言い、それに付け加え

『そんなことより早く食堂へいこうぜ、料理がさめちまう』
と足踏みをしながら言った。

いや、随時料理を作るから別にさめないんだけどな
そう思ったがもう反論するのが面倒だったのでやめておいた。
スキップしながら食堂へ向かう桜井を見て

『あいつは将来どうなるんだろう?』

とだれにも聞こえない程度の声で、そつと呟いた。

第四話 日常

食堂で昼飯を食べ終えて教室に帰ると、まだ北沢の周りに人だかりができていた。

まあ転校生なんてこんなもんだろ

と、心の中で思いつつ横をみると桜井はシャドーボクシングをしていた。

本当にちゃんとパンチを避けられるのだろうか？

そう思い始め桜井の目の前に立ち顔面に目掛けて、おもいきり拳をふりかぶると

ガン！！

彰の拳付近から鈍い音がし桜井は後ろの方に吹き飛んでいた。

俺の拳も捨てたもんじゃないな

そんな安楽的なことを考えていると

『いきなり、なにすんだよ！痛いじゃねーか！』

と、桜井は鼻血を流しながら怒った様子で言ってきた。

『いや、お前なら避けれると思つてさ、わりいな』

と、適当に言つてやるとかんにさわつたのだから。

『だめだ、許さねえ！俺とタイムンだ！神内！！』

そう言つとファイティングポーズをとりはじめ

『どつからでもかかつてこ・・・』

ゴン！！

本日二回目の手の感触が伝わり、桜井はもう一度後ろに吹き飛んでいた。

やっぱり俺ってすごいわ

そう思いながら桜井をみていたが何故か立ち上がったこない。

恐る恐る顔を見ると、完全に白目を向いて気絶していた。

さすがにこれはやばい！

と思ひ、桜井の顔にすごい勢いで往復ビンタをくらわせると

『ぐへえ！』

と鼻血をそこらかしこにはらまきながら飛び起きた。

『俺は何をしていたんだ、なんで鼻血をだしながら寝ていたんだ！』

と頭を抱えながら唸っている。

記憶が飛んでいるのか、都合がいい。

と思い

『お前が走って壁にぶつかって気絶したから俺が助けたんだよ。』
と言った。

そうすると桜井は目をうるうるさせながら

『そうか、ありがとう我が親友！神内よ！』

と、抱きつこうとしてくる。

『止める、服に血が付くだろう！』

と桜井を振り払った。

そうすると

『おう、悪いな、いやしかしいい友達を持って良かったぜ』

とスキップをしながらトイレに鼻血をふきにいった。

俺も『都合』のいい友達が持ててよかったよ

と心の中で思い、北沢の方を見るともうすでに人だかりはほとんどいなくなっていた。

さあそろそろかな。

と思い席に座ると即座に机の上に倒れこんだ。

正直一時間目から今まで寝ていて、次の五時間目から七時間目まで寝る予定なのである。

これでも授業についていけるのだから、自分でもたまにすごいと思ったりする。

まあそんなわけで睡眠タイムに入ろうとすると、

ガンー！！

これも本日二度目だよな

と、すでに今日で二個目のたんこぶをさすりながら

『おい、葵お前は俺を殺したいのか？』

と怒り混じりに聞くと

『別にそんなんじゃないよ、そろそろ授業だから起こしてあげようかなあ〜』と黙って』

と舌をちよこつとだしながら可愛らしげに言った。

もう、一生起きれなくなる所だったわ！

と思ったがそんなことは当然言えず

結局このまま、頭に2つのたんこぶをのせたまま授業を寝ず（痛すぎて寝れなかった）受けることになってしまったのである。

第五話 疑問（前書き）

用事があったので久々の更新です。
意見や感想など受付中ですのでお願いいたします。

第五話 疑問

本日最後の授業が終わり、誰が北沢と帰るか（ほとんど男だが）話し合っていた。

さあじゃあ俺はそろそろ帰るかな。

とカバンを持ち立ち上がって群がる男共を横目にドアにむかうと

『私あの人と帰ります。』

ん、北沢の声と一緒に帰る人見つかったんだなよかったよかった。

そう思いドアに手をかけ開けている途中で

『待つてください、一緒に帰りましょう』

なと後ろから袖を握られる。

これはやばいな・・・

と思った瞬間

『おい神内！てめえ北沢ちゃんどうゆう関係なんだ！？』

『自分だけ先駆けとはなんてやつだ』

男子AとZ共が騒ぎだす、無論その中に桜井がいたりするわけだが。

『ちょ、ちよつと！いきなりそんなこと言われても！』

と後ろを振り向いて言った

そうすると北沢は目をうるうるさせ上目遣いで

『私と帰るのは嫌ですか・・・？』

と一層袖を強く握り言った。

こんな顔されて嫌と言える奴なんていないだろう。

『わかった、いいよ』

とため息をつきながら言った。

そうすると、心なしか女子からの視線も痛いような気がする、

大変ことになったな。

そう思いながらも嬉しいと感じてしまふあたり自分がだめだなと思ったりもしていた。

家に着くとすぐ私服に着替えて家を出た。

いつものように一人で星を見るのなら制服でいいのだが、今日は北沢に誘われてしまったのである。

てかなんで俺に親しくしてくるんだ？

よく考えてみれば俺に親しくしてくる理由がわからない。

いや、まてよよく考えたら今の学校に転校してくる1日前に会っているから俺が一番話しやすいのも当然か・・・

と丘に続く道を歩きながら思っていた。

丘に着くとすでに北沢は来ていた。

『悪いな、待った？』

と息を切らしながら聞くと

『いえ今来たところですよ』

と優しい笑顔で言った。

もう日がくれていて月明かりが照らす少女の顔は昏間に見るよりも

一層綺麗に見えた

しかし恋人同士の会話みたいだな

と思ったが口に出すほど勇氣はないので言わなかったが・・・

しばらくその後静かに星を見ていたがふと疑問が浮かんだ。

『そう、いえばなんでこんな場所知ってるの？』

と口にする、

まるでそう聞かれるのをまっていたかのように

『私は小さい頃この町にいたんですよ、まあ親の仕事の都合で引越したんですけどね』

と過去を振り返るように答えた。

幼い頃引越した少女・・・

心の中で、なにかひっかかっているような気がしたが気にせず綺麗な星をただ眺めていた。

第六話 夢

『待つてよお〜』

まだ小学校低学年ぐらいであろう少女が同じぐらいの歳の男の子に走りながら言つと

『遅いんだよ、早くしろよ』

と坂を上りきつた場所で振り向き様に少年が言った。

そんな場景を彰は空の上から見てるかのような視線で見ている。

あの二人は誰なのだろう？

そう思うが答えがでるとも思えなかった。

そんな事を考えている内に少女が坂を上りきつたよう

と、早いよお〜ちよつとぐらい待つてくれてもいいのに』

と少年に頬を膨らましなが言つていた。

そうすると、少年は

『こんなんでへこたれてたら軍隊には入れないんだぞ』

と腕を組みながら偉そうに言つと

『軍隊になんか入らないもん』

と一層頬を膨らましなが言つていた。

そんな少女を横目に少年は草の上に仰向けになり寝ようとした。

そうすると、少女は

『なんで寝るの？星を見にきたんでしょ？』

と、少年を凄い勢いで揺さぶり起こすと

『わかった！わかったからやめろつて！』

と渋々といった様子で上半身を起こした。

どうやら星を見に来ていたらしい

と聞いたとおりの事を頭の中で復唱していると、少女が上を見上げ

『ここから見る星は凄く綺麗だね』

と感動の色を隠さずに呟くと

『なんたつて俺の秘密の場所だからな』

とまるで自分が作ったと言わんばかりの口調で言った。

そうすると、少女は首を傾げ

『じゃあなんで私に教えてくれたの？』

と少年の顔をのぞきこむように言う

『別になんとなくだよ』

と恥ずかしかつたのだろうか少女から顔をそむけながら言った。

『ふーん、なんとなくか・・・それでも嬉しいな』と少女はそむけた顔を追って覗きこむようにして言うと少年は顔を真っ赤にした。

きつとあの少年はあの少女のことが好きなんだな

と彰は心の中で思っていた。

そうしながら長い間二人で星をみていたが

突然少女が

『ねえ私・・・実は・・・君の事がす』

ジリリリリリ！！

けたたましく目覚ましのベルが鳴り響く

うるさい

寝坊しないように目覚ましを変えたのが仇となったようだった。

でもこれで遅刻する事はないな

そう思いベルを消そうと時計を持つと大変な過ちにきずいてしまった。

一時間設定する時間間違えた・・・

学校も始まりはや三ヶ月たった夏の空に鳴り響くセミの声は時計のベルよりも頭の奥に深く鳴り響くのであった。

第七話 再会

みーん、みーん・・・
暑い・・・

ふとんから這い出て時計をみると時刻はすでに8時をまわっていた。
やばいぞ！遅刻だあああ！

もう何度も叫んだブレーズをまた頭に流し朝食も食べず家を飛び出した。

学校までの道を猛ダッシュで向かっていると
ブオオオオオオ！！

後ろからバイクのエンジン音がちかづいてくる
俺もバイクの免許とればよかったかなあ

と思っていた矢先
バアアン！！

背中にもものすごい衝撃を受け彰は前に五メートルほど吹き飛んでいった。

『すいませーん大丈夫ですかー？』

と反省の色もなく近寄ってくる女性の声がした。

怒鳴り散らしてやろう

そう思い勢い良く後ろを振り返ると

『葵い！？』

そう、後ろでヘルメットをとってたっていた女性はまぎれもなく葵であった。

葵は彰の顔を見るなり

『なーんだ、彰か、心配して損しちゃった』

とつまらなそうな顔をし、バイクにまたがった。

『さてよ！なんで何事もなかったかのように立ち去ろうとしてんだ

よー！』

彰は背中 of 打撲部を擦りながら訴えかけると、葵はヘルメットを被

りながら

『だってあなたなら大丈夫でしょ？』

とさも当然といった様子で聞きながらエンジンをかけ、

『じゃあ学校遅刻するから、またねー』

と原付の最高速度ぐらいであるうスピードで立ち去っていった。

その場に残ったのは、無惨にも画面が割れたケータイと腰を痛めた彰だけであつた。

俺って一体・・・

そう思わされた一瞬でもあつたのであつた。

はあゝ・・・

彰は口からはため息しかでなかつた。

学校に着き当然遅刻で怒られ、その後も授業中に居眠りをしていたら、先生の投げたチョークが額にヒットし後ろにそのまま倒れ、あげくのはてには、女子の体操服を盗んだ疑惑までたてられてしまった。

おそらく一年間の不幸が今日1日で来たんだらうな。

と、思い家の玄関を開けるとみたことのない革靴があつた

まさか・・・

そう思い恐る恐るリビングのドアを開けると

『おお、彰よ今帰ってきたのか』

と悠然とコーヒーを啜りながらこちらに体を傾ける五十代前半の初老の男性

この人が泥棒だつたらどれだけ良かったらう？

そう思うがこの男性は泥棒ではない、この人は・・・

『親父なんで帰ってきてんだよ!』
そう、まぎれもなくこの初老の男性は神内彰の父親、子供の面倒も
みず母親が病気だったにも関わらず、仕事のほうが大事と理由で看
病もせず、それどころか会社の部下の女性と浮気までしていた彰の
最も憎んでいる相手

じんないまさひと
神内雅仁
であった。

第八話 憎悪

『なんで帰ってきてんだよ!?!』

喉がはち切れるばかりの声で叫んだが雅仁は一切焦る様子もなく『私の家に帰ってきて何が悪い?それともなにか?自分の家に入るのにお前の許可がいるのか?』

と音量こそ大きくなかったが、その声の威圧感に彰は圧倒されたしかし、負けじと

『そんなんじやねーよ!恋人と二人で暮らしてたんだろ?それならなんで帰ってくんだよ!』

と、今度は少し小さめの声で訴えかけると、思い出したと言わんばかりの顔をし

『ああ、実は梓もここでいっしょに三人ぐらしをしようと思っとな。

』
(梓あずさとは雅仁の恋人である)

一瞬世界が真っ暗になった。

いっしょにこの家で住むだと・・・

『冗談だろ、親父?』

そう、聞いてはみたがあ親父に限って冗談などゆっはずもなく

『いや、本当だ。梓もそれがいいと言っているしな』

とそうやすやすといい放つ。

そうだ、今日の晩御飯は魚の煮付けにしよう。

つい、現実逃避してしまうほどの事態だった。

『俺はそんな事許さねーぞ!大体結婚もしてねーんだろ?それなら・

・・・』

『いや』

と途中で言葉を打ち切られたと思えば

『すでに婚約届けはだしている、だから彰と梓は正真正銘の家族なんだ』

頭がものすごく痛くなってきた。

絶望の表情を隠しきれない顔を見て雅仁は察したように

『彰よ、気持ちわかる。けどな今は梓がお前の「今」の母親なんだ、だから「昔」の母親の事は忘れる。』

と、真剣な表情をして彰に語りかける。

その瞬間

『お前に俺の気持ちなんかわかるはずない!』

と家を飛び出した。

『おい、まて!彰!』

雅仁の声が聞こえたが走るのをやめずがむしやらに町を走り回った。晴れ渡った空に降るはずのない雨を降らしながら・・・

結局ここに来てしまった。

夜になり気づけばやはり丘にたっていた。

『はぁ・・・』

思わずでた溜め息が夜空の中に消えていく。

俺は何をしているんだろう、逃げても意味なんてないはずなのに。

その場に寝転び、星を見るといつも以上に輝く星が自然と涙腺を緩ませる。

『・・・く!』

流れそうになる涙を強引に服の袖で拭き取りもう一度空を見ると黒い人影に遮られ星が見えない。

『どうされましたか、神内さん』

そこには、出会った頃と同じように月の光に照らされた北沢がたっていた。

第九話 救済

『なんでここにいるんだ？』

と、驚きを隠しきれない様子でたずねるとその質問がくるとわかっていたかのよう

に『そうですね、星が私をよんだからでしょうか』

と、とぼけたように答える。

北沢も冗談を言うんだな。

と、考えていると自然にさっきまでの怒りにいた感情が少し和らぐような気がした。

彰の顔が少しほころんだのをみて不思議そうに

『どうされましたか？』

と首を傾げながら聞いてくると

『いや、なんでもないよ。ありがとう』

と二つの意味を含んでいったつもりだったが、

『なんだか、わかりませんが一応感謝の言葉は受け取っておきます

ね』

とちゃんと伝わらなかったようだ。

まあ、いいか。

今そう思えるほど心に余裕ができたのは北沢のおかげなのだから

そんな事を思っている北沢は、はっとしたように

『そういえば先ほどはどんなされたのですか？、話難いことでした

らしいのですけれど・・・』

とすこし控えめの声で顔を見つめながら語りかけてくる。

なぜだろう？北沢になら話してもいい気がする。

そう思えたのはきつと錯覚などではないのだろう。

だから話してみることにした、今日あったすべてを・・・

『・・・そんなことがあったんですか』

少し目を潤ませつつも、しっかりとした眼差しでこっちを見つめる。

『これから彰さんはどうなさるつもりなんですか？』

なんで名字から名前に呼び方が変わっているのだろう。

そう思ったが今ふれるべき所でもないだろう。

『そうだな、どちらにせよいずれ家に帰らなきゃ行けないとは思っ

けど今日はちよつとな・・・』

『なら今日は内に泊まりに来ますか！？』

『・・・』

第十話 緊張

結局来てしまった・・・

彰は普通の一軒家より少し・・・いやすごく大きめのもはやお屋敷というに相応しいだろう家の前に立っている。

『どうしたのですか？早く入ってください』

とせかすように手招きをしてくる。

ていうか、この町にこんな家あったっけ？

家の外観は純和風なのでここ最近たった物では無さそうだ。

そんな事を考えていたが、とりあえず彰を呼ぶ声がだんだん大きくなってきたので、少し小走りで門をくぐった。

中に入ると意外な事に洋室もあるようだった。

しかし・・・

ドクン！ドクン！ドクン！

心臓がすごい勢いで鳴り響く。

俺、女の子の家とかいったことないんだよな・・・

彰は動機を静めるために

『そういえば、お父さんとかお母さんはいないのか？』

と聞いてみると、

『ええ、私今一人暮らしですから』

『・・・てことは今日家に二人？』

『そうゆう事になりますね』

すこし照れたような顔をしながら言う。

ドクン！！ドクン！！ドクン！！

体の中に太鼓でもある事を錯覚させるような動機が起こる。

二人きりだと・・・

可愛い女の子と一晩二人きり、聞くだけなら羨ましい限りのシユチユエーションだが、実際なってみるとそこまでいいものではないようだ。

『ではお茶でもいれてきますね』

北沢の部屋に通され座るとお茶をいれるために部屋を出ていった。

しかし、女の子の部屋に入るなんて・・・

1人になった部屋で落ち着くためにケータイを開いた瞬間

ビリリリリ!!!

いきなり、誰だよ!?

画面をみると相手は桜井だった。

電話を取ると

『おい、神内いゝ今暇かあゝ?』

『暇じゃない。切るぞ?』

『おい、ちよつと待てよ俺んちでいつしよに映画でも見ようぜ』

『だから暇じゃねえって!』

その時だった。

『彰さんお茶入りましたよ』

お盆の上に紅茶を乗せ北沢が現れた。

『その声は北沢!?おい、神内今どこにいるんだ!?まさか二人は
そうゆうかん・・・』

ブチ!!!

携帯の電源を切る。

次会ったらなんて説明しよう?

そんな事に頭を悩ましていると、

『どうかしたんですか?突然ケータイのバッテリーを抜いたりして』

何も事情を知らず不思議そつに首を傾げる少女が今はすごく羨ましく感じた。

『・・・俺ここで寝るの?』

『ええ、そのつもりですが。』

『あつかましいけどさ、他の部屋とかはダメなの?』

『片付いていないもので』

『そうか・・・でもさ・・・』

『でも?』

『同じ部屋はいかんだろ!?!』

同じ部屋に二組ひかれた布団をみながら叫ぶ。

『何ですか?』

『いや、何でつて・・・』

本当にわからない様子だからある意味たちが悪い。

いや、もついい腹をくくろつ。

そう思い布団に潜り込む。

北沢もそれに合わせて横の布団に入ったようだった。

電気が消されると

『おやすみなさい、彰さん』

『ああ、おやすみ』

緊張はしていたが、疲れがたまっていたので意識はすぐに闇へと落ちていってしまった。

第十一話 夢？

『今日はどこにいこうか？』

少女は楽しみにスキップをしている。

少し後ろから

『おいほんとにいいのかよ？』

と少年が不安げな顔をしている。

・・・いつもの夢の続きなのか？

ぼんやりと考えながら二人の様子を見てみると、

『ごほん！ごほん！』

少女が突然咳き込み始め出すと、少年が後ろから走ってきて

『大丈夫か！？だから病院を抜け出すなんてだめだっていったのに・

・・・』

と、少女の手を引いて

『やっぱり病院に帰ろう。酷くなるかもしれないし』

と歩きだそうとすると、

『嫌だよ！！』

少女は体に似合わないほど大きな声で叫んだ。

『だって次はいつ出れるかわからないんだよ？次いつ、ーくんと遊べるかわからないんだよ？』

と先ほどはうってちがいで、聞こえるか聞こえないかぐらいの声で呟いた。

何故あの男の子の名前だけ聞こえないんだ？

そもそも二人は誰なんだ？

俺ただの妄想なのか？、いやそうではない気がする。

そう考えている内に結局遊ぶ事になったようだ。
どうもあの少年はあの少女に弱いらしい。

『じゃあいこうよ!』

元気よく少女が歩き出した瞬間

バタン!!

少女がまるで操り人形の糸がきれたかのように倒れ込む。

『おい、しっかりしろ!』

少女に駆け寄り体を揺さぶるが起き上がる気配はない。

『まってるよ、すぐに病院まで運んでやるからな!』

少年は少女を背負い走っていく。

セミの鳴き声とこだまするかのように少年の足音が雲一つない青空に消えていく。

ああ、少女はどうなるんだろう?

なぜか関係ないはずなのに心配になってくる。

そうしている内に意識はだんだんと薄れてゆく。

・・・ああ、あの子達はどうなるんだろう?

チユンチユン!

小鳥のさえずりに目をさますと見覚えのない天井が目に入ってきた。

え?ここどこ?俺拉致されたの!?

1人と和室の布団で頭を抱えていると

『あ、目を覚ましましたか?もうすぐ朝食ができるので待っていてくださいね』

とエプロン姿で顔を出した北沢。

そうだ、昨日ここに泊まったんだ。

北沢に貸してもらった寝巻き（もちろん、女物だったのだが）のま
まりビングにいくわけにもいかず、とりあえず制服に身を包む。

・・・女子の家に泊まっちゃったよ。

なぜか、リビングに向かう足取りは決して軽いものではなかった。

第十二話 和解

『これからどうなさるんですか？』

朝食のトーストをひとかじりしたあとふいにそんな事を聞いてきた。そうか、いつまでもこうしているわけにもいかないもんな。

口に含んだコーヒーを喉に通した後、

『俺、いったん家に戻るよ。』

『大丈夫ですか？』

『ああ、大丈夫だ。気持ちの整理もついた、とりあえず親父と話し合ってみるよ』

食べ終えた朝食をかたずけている北沢を背に帰る準備を始める。

準備が終わると、玄関までゆき、

『泊めてくれてありがとう。』

『いえ、気になさらないください。』

『じゃあ』

『はい、さようなら。』

そのセリフを聞き終えると同時に玄関のドアを開け家への道のりに足を進める。

ついに、ここまで来てしまった。

家のドアに手をかけた所で躊躇ってしまう。

中に親父の婚約者がいたらどうしよう。

そんな事を考えると足がこれ以上進まないのだ。

しかし、そんな事ばかりもいつてられない。

ドアノブを持ったまま直立不動の彰は、端からみたらどうみたって不審者にしかみえない。

覚悟を決めドアノブを回し家の中へと足を進める。
リビングにいくと親父が机につつぷして寝ていた。
婚約者がいる気配は・・・ない。

彰の帰ってくる音に反応して親父も起きたようだ。

『おお、彰帰ってきたのか。どこにいつていたんだ？心配したぞ。』
ありきたりのセリフに少し嫌気がさしたが、そんな事でいちいち腹をたてている場合ではない。

『ああ、だが帰ってきたからといってここにあの愛人じみた人と住むのを納得したわけじゃない。それなりの処置をしてもらわないと俺はもう親父とは家族としての縁をきるつもりだ。』
実に子供っぽい意見だと彰自身も思ったが、このさいまわりくどい事をいっても仕方がないと思ったので気持ちをそのまま親父にぶつける。

親父は少し考えている様子だったが、やがて答えが決まったらしく、彰の顔をみて

『わかった。じゃあこうしよう、1ヶ月に一回だけこの家に来てお前の母となる人にあってもらう。それでどうだ？』

父の眼光は昔と変わらず強いままだ。

すこし圧倒されながらも彰は力強く縦に首を振る。

父はそれを見ると少し寂しげな笑みを残し椅子から立ち上がる。

『では、私は帰るとしよう。来月の仕送りの分は置いておくから使いきるなよ。』

『ああわかった、大事に使おうよ。じゃあな親父』

簡単な挨拶を済ました後、父は玄関から出ていく。

その瞬間、

『はあ・・・』

精神的にあまり良くない状況が続いたため、やっと落ち着けたといえよう。

先ほどまでかいていた嫌な汗も部屋のクーラーの風によってひいて

いくのであった。

第十三話 お誘い

『えー、今日は文化祭に何をするかを決めてもらおう。それぞれの班で話しあって意見をひとつだしてくれ。』
担任はそれだけ言うと教室から出ていく。

そうすると、当然だが教室は、一気に騒がしくなった。

三年生は今年で最後の文化祭だからさうとう熱が入っているようだ。どこも四人一班で楽しそうに話し合っている。

そして肝心の彰の班は、葵、北沢、桜井というある意味ドリームメンバーであった。

『なあなあメイド喫茶やろうぜ』

一体何を考えているのだらう、桜井が鼻の下をのばしながら叫ぶ。

『却下』

『じゃあ水着喫茶』

『却下』

『じゃあ女子相撲たいか・・・』

『却下』

『じゃあ・・・』

『却下』

『じゃあなんならいいんだよ!』

葵がことごとく桜井の意見（欲望）を否定するためついにきれた。

あいつ、葵に齒向かいやがったな。俺は知らねーぞ。

そう思った瞬間

『ぐへえええ!!』

葵の手刀が桜井の首に降りおろされた。

白目を向いて倒れた桜井はピクリとも動かない。

『さあ、話し合いましょうか。』

一辺の曇りもない笑みで彰と北沢に微笑みかける。

当然二人とも夢中でうなづくことしかできなかった。

『葵さん凄かったですね。』

嫌みではなく純粹に凄いと思ったのだろう少し苦笑い気味であった。結局文化祭はただの喫茶店になった。

ついでにいつておくと、桜井が目を覚めたのは手刀をくらってから二十分後のことである。

学校が終わり二人で並んで道を歩く。

こうやって二人で帰るのも大分慣れたな。

あの北沢の家に泊まってからこうやって分かれ道まで二人で帰るのが日課になっている。

最初は恥ずかしかったが、今となればもうなれたものだ。

『彰さん、次の日曜ご予定はありますか？』

『ああ、特にないかな。』

『では、デートを致しませんか？』

『デート！？』

つい、声がうわずってしまった。

『私とでは嫌ですか・・・？』

北沢の顔が一気に暗くなる。

『いや、嫌じゃないけど・・・俺なんかとでいいの？』

少し相手の顔色を確めるように言うと

『ええ、彰さんとがいいんです！』

と、こっちが恥ずかしくなるようなセリフを大声で言う。

彰は、北沢に圧倒されつつも

『うん、それだったら・・・いいよ、遊びにいこう。』

『遊びじゃなくてデートです!』

『うん、デートにいいこう。』

まだ、付き合っただばかりのカップルのような会話が沈みかけの夕暮れの空へと消えていく。

そうして、分かれ道にたどり着くと

『では、さようなら彰さん、日曜日忘れなてくださいね。』

『ああ、わかってるよ。じゃあな北沢。』

彰が言い終わると、北沢はちょうど夕日が沈む方向へと歩いていく。その後ろ姿が心なしか嬉しそうに見えたのは、錯覚であろうか？

大変な事になったな・・・

そう思いつつも、心のどこかでは嬉しさがあった。

第十四話 不安

『うんまだかなあ』

時計を見ると、現在の時間はまだ9時40分であった。

今日は北沢とのデートの日だ、約束の時間は10時だが、既に二時間前から待っている彰のことを考えれば遅く感じるのも当然だろう。

『すみません！待ちましたか？』

『いや、今来た所だよ』

少し息をきらしながか来た北沢に待ったなんて言えるはずもなく、よくあるカツプルのセリフを言うので精一杯であった。

『しかしこんな田舎町でどこにいくんだ？』

と、疑問に思ったので聞いてみると、よくぞ聞いてくれました！という顔をし、

『実はですね、新作の映画が上映されているのでそれを見に行こうと思っっているのですが、どうですか？』

と満面の笑みで聞いてくる。

まあ、断る理由は当然ないので見に行くことにした。

『これを見るのか？』

『ええ、嫌ですか・・・？』

『いや、嫌じゃないけどさ・・・』

北沢が映画館にくるなり、新作広告で指をさしたのは・・・

世界の端の方で愛を叫ぶwith北海道

であった。

これ面白いのか！？

だれだっって疑問がわくような作品名だろう。

だがしかし、本は表紙で判断してはならないと言っし、もしかしたら面白いのかもしれない。

意をけっしてキップを買い中へと入る。

なぜ、新作映画のはずなのに客が三人ぐらいしかいないんだろう？ そんな疑問をよそに、映画の上映が始まったのであった。

『とても感動しましたね、私このシリーズ大好きなんですよ』

感動の涙がまだ北沢の目に少し残っていた。

『こ、これシリーズあるんだ・・・』

『ええ、今回で五作目ですね』

『へ、へえそうなんだ・・・』

正直に言おう、しゃれになつてないくらいおもしろくなかった。

なぜ愛を叫んでいる主人公が海パン姿なのか？それ以前になぜヒロインがあんなにブサイクであったのか？

こんな事を言い出すとキリがないくらいの映画であった。

なぜあんな映画を北沢は好きなんだろう？

聞いてみたかったが失礼な気がするのであえて聞かないでおいた。

『映画おもしろくなかったですか？』

黙っている彰を見て不安になったのであろう。

『い、いやとても面白かったよ』

『そうですか、よかったです。では来年もまた見にいきましょうね』

墓穴をほってしまった・・・

そう思ったが来年もと言う言葉に妙な不安感を覚えてしまいなぜか反論できないのであった。

『はあ、今日は楽しかったですね』

『ああ、そうだな』

あれから、映画館を出た後、ウィンドウショッピングをして昼ごはんを食べそれから町をぶらぶらした後結局丘の上に来ていた。

『昼に來ると夜に來るとではまたぜんぜん違いますね。』

長い髪を少し掻あげながら言う。

こうみるとやっぱりきれいだな。

そんな事を思っていると、

ドクン！！

見覚えのない記憶が走馬灯のように頭を駆けめぐる。

俺は昔今のようになんかやって女の子とここに来たことがあるような気がする。

『なあ北沢お前って……』

『どうかしましたか？』

『いや……なんでもない』

『そうですか？』

少し不振がっていたが、気にしてない雰囲気だった。

もしかして俺は昔北沢とあったことがある……？

聞いてみようかと思ったが、聞くとなにかが壊れそうに聞けぬまま家へと帰ったのであった。

第十四話 不安（後書き）

すこし話がぐだぐだになってしまいました。後々それなりに重要になってくる話なので、ちょっと無理やりに書きました。

意見や感想お願いいたします。

第十五話 文化祭前日

『ちよつと、もう材料は全部揃ったの?』

『この角材はどこにおけばいいんだ?』

『ああ、衣装が一着足りてない!』

学校のそこらかしこがいつになく騒がしくなっている。

そう今日は文化祭前日なのだ。

どこのクラスも活気ずいていている、もちろん彰のクラスも例外ではない。

『おい、俺は何をすればいいんだよ?』

『ああ、神内くんは当日ウェイトレスをしてもらってから今日は特に何もしてくれなくていいよ』

『おお、そうなのか』

クラスの女子に言われ途端にやる事がなくなってしまった。

これから何をしようか?

そう思っていた矢先、

『おい、神内買出し手伝ってくれないかあ?』

遠くのほうから桜井がかけてくる。

特に用事もないし、いいだろう。

『おう、いいぞ何を買いにいくんだ?』

『メイドのコスプレ・・ぐへえ!』

桜井にボディブローを食らわしてやる。

しゃがみこみながら上目使いに

『う、嘘だよ神内・・食材が足りてなかったから買いにいくんだよ』

『それならそうと早く言えよな。』

と、痛みに体をよじっている桜井を無理やり立たせる。

『てか、買い出しは俺たち二人だけなのか?』

少ないとはいってもそれなりに持つものはあるだろう。当然と言え

る疑問を尋ねると

『俺に神内のほかにいつしよに買出しにいつてくれるような奴がいると思うかい？』

と、満面の笑みをうかべているのになぜか目に少し涙がたまっていた。

実を言うと桜井には一人も友達がない。

顔もそれなりに良くスポーツもできるのだが、それをすべて覆すほど性格が悪い。

そのためか、クラスでまともに話すのが神内しかいないのだ。

『そっか・・・悪かったな変なこと聞いちまって』

桜井の肩をたたき優しく言っていると、

『逆にむなしいよ！もういいよ、買出しなんて一人でいつてやるよ』

と、なぜか怒りながら廊下を歩いていく。

遠ざかる桜井の背中見ながら、彰もどこかに行こうとすると、

『追いかけてこいよ！』

遠ざかったはずの背中がまた近くに戻ってきた。

それから二時間ほど買物に付き合わされてしまったのは余談である。

日も暮れ時計の針も、もうすでに八時を指そうとしているにもかかわらず学校は未だほとんどの教室に明かりが灯っている。

『まだ、準備は終わらないのか？』

メニューの最終チェックをしていた女子に聞いてみると、

『そうだね、あと三十分ぐらいだからまって』

と、いって厨房（といっても教室にダンボールの敷居で作った場所にガスコンロを置いただけの簡素なものだが）に入ってしまった。

あと三十分か・・・

意外と暇をつぶすには少し長い時間であった。

あ、そうだ。たしか屋上が開いてたっけ、ちょっといってみるか。

と、いろいろな看板やその他の大きな物を作るのに開放されていた屋上へと向かう。

屋上に入るための少し重い鉄のドアを開け空を見るとそこには丘の上にも引けをとらないほどの満天の星空が見えていた。

時々ここから星をみるのも悪くないかもしれないな。

そう思いながら完全下校の時間までそこで一人星を眺めていたのであった。

第十六話 文化祭

『それじゃあカウントダウンいくよ！5、4、3、2、1』
『0！』

放送部の合図で文化祭が始まった。

文化祭を感じさせるBGMと放送部のテクニックによって最初から盛り上がりは最高点に達した。

それと同時に校門からかなりの数の人が入ってくる。

他の高校の文化祭と違い、彰の通う高校は文化祭が一日しかないためそのぶん人が集中してくる。

本当は二日あったほうがいいのだろうが三年生の受験勉強を配慮しての事だろう。

と、いつてもまだ彰は受験する大学も決まっていけないのだが。

『いらつしやいませ、何名様でしょうか？』

いつもでは絶対ありえないような優しい笑顔で葵は一番最初に来たお客さんを席へと案内していた。

かくゆう彰も朝から仕事が入っている。

じゃあやるか！

少し背伸びをし、お客さんのもとへと急いだ。

『ふうやつと休憩かあ〜』

とりあえず、午前の自分の出番は終わり教室の一角に作られた休憩場所で彰は体を休めていた

簡単なものだと思ったけど以外としんどいな。

そんな事を思い残り少ない休憩時間を過ごしていると、

『お疲れ様です』

つぶしていた頭をあげるとそこには北沢の顔があった。

『ああ、北沢もお疲れ。料理作りも大変だっただろ?』

『いえ、そんな事はありません。とても楽しいですよ』

北沢は彰の前の席に座り話していると、

『へーい、お二人さん元気かい?』

勢いよくドアを開けて入ってきたのはピエロ・・・の格好をした桜井であった。

また妙に似合っている所が腹が立つがそのあたりはふれないうで置くことがお互いの精神的にもいいだろう。

『そういえばさつきクラスのほうが妙に騒がしかったみたいだぜ。』

神内いつてみたらどうだ?』

『そうだな、もう休憩も終わるしいつてみるか。』

『では、私もいつしよに行きますね』

と、彰が立つと同時に北沢も席を立つ。

教室に着くと泣いている女子クラスメイドと怒り狂っている二十代半ば辺りである男とその男の怒りを静めようとしている男子クラスメイドがいた。

状況を察するに、飲み物を運んでいた女の子が男に誤ってこぼしてしまつたらしく、服代を弁償をしろとゆう事らしいのだ。

どうしようか?ここは助けたほうがいいよな。

と思い、行こうとすると

『お客様どうかなされましたか?』

彰より先に男のもとへといったのは、北沢であった。

男は後ろを振り返るなり、

『うるせえ!お前には関係ねえ、すつこんでろ!』

と、辺りにつばを巻き散らかしながら言い放つた。

北沢は臆する事なく、

『いえ、内のクラスの事なので。なにか失礼にあたることはありません。』

『謝罪？そんなもんいらねーんだよ！見てみるよこの服、これ二万したんだぞ！どうしてくれんだよ！』

明らかに千円セールよろしくの服をさして男はまた激怒する。

『とりあえずこの教師でもなんでもいいから呼べよ！話はそれからだろ！』

『いえ、なんでもしますのでそれだけは・・・』

おそらく北沢は先生を呼ぶとこの店が出店中止になるかもしれないのでそれを恐れたのだらう。

その言葉を聞き終えるなり男はあからさまに下品な笑みを浮かべ

『ほう・・・それなら俺と今日一日付き合ってもらおうか』

『・・・え？』

北沢は本当にあんなことを言ってもこうなるとはおもわなかったのか、大分焦っているようだ。

そろそろ助けなきゃな。

『すみません、お客様ちよっとお待ちください。』

『ん？誰やお前？』

『私は神内彰と言うものです。すみません先ほどから話を聞いておりましたがその服の染みも洗えば落ちるものでしょうし、今日の所は水に流していただけませんか？』

と、頭を深く下げ謝罪をする。

『だから、そんなんじや許されへんてゆてんねん！』

と、叫び終わると男は何かを思いついたような顔をし、

『じゃあ、俺と腕相撲して勝てたらもう許してやるよ。そのかわり負けたら兄ちゃんに二万払ってもらうぜ？』

ここはもうYES以外にないだらう。

『わかりました。』

その男は腕をまくと、その下から先ほどまではみえなかったはちきれんばかりの筋肉が見えている。

『じゃあやろうか、俺が負けるわけないけどな。』
ギャラリーの一人が審判を勤める。
『では、レディーファイト!!!』
勝負は一瞬でついたのであった。

少し離れた所で炎が輝いており、その周りで音楽に合わせ男女がペアになり踊っている。

『彰さんつとでも力持ちだったんですね』

あの後、結局彰は男に勝った。その後男は、覚えてる！とありきたりな捨て台詞をはき帰っていった。

そして無事に文化祭が終わり、今は後夜祭というわけである。

『ありがとうございますね、助けていただいた』

『いや、当然の事をしただけだから』

ほんのり光に照らされている北沢の顔はとてもきれいだっただ。

『ここでも少し音楽が聞こえますから一緒に踊りませんか？』

『え？でも俺踊りとかできないし』

そうゆうと少し笑い

『私もできないから大丈夫ですよ』

と、言って彰を立てさせる。

グラウンドの端の方のだれにもみえない場所で二人だけのダンスパーティが始まった。

今思えばこの時からかもしれない。

北沢の事を好きになったのは・・・

第十六話 文化祭（後書き）

今回は調子に乗っていつもの二倍近く書いてしまいました（笑）

意見や感想募集中です。

第十七話 夢？

すべてが白で統一された部屋にリノニウムの床が擦れる音が鳴り響く。

おそらくここは病院なのだろう。

この夢にも慣れてしまった彰は大部屋の端にある一室を覗くとやはりあの少年と少女がいた。

『ほんとに大丈夫かよ？』

『うん、体調も良くなってきたし大丈夫だよ』

病院のベッドで寝ている少女とその脇で座っている少年が話している。

『あのさ、外に連れ出したりしてごめんな・・・』

少年が少しうつむきながら呟くと、それを否定するかのように首を横にふり、

『ううん、私が外に出たいだなんて言ったから・・・』

と、少女も同じようにすこしうつむきながら答えた。

それから長い沈黙が起こる。

その時間は幾分何時間にも感じられたのであった。

しばらく後に沈黙を打ち破ったのは北沢のほうからだった。

『ねえ、私の病気が治ったらまたいつしよにまた丘にいつてくれる？』

少年は首を縦にふった、それを見て少女は満足そうな笑顔で

『ほんとに？ありがとう、それだったらさもう一つだけお願いがあるんだけど』

少女の顔がまるで夕日を浴びているように紅蓮に染まっている。

『なんだ？』

そんな事にきずいていない少年はなんのためらいもなく少女に聞く。

『あのね・・・もし退院したらね・・・私と結婚してくれる・・・？』

さきほどまで普通の顔をしていた少年が少女のように顔を紅蓮に染まっっていく。

『な、何バカな事いつてんだよ!?!』

少年が少し声を荒げた。

『いやなの・・・?』

少女が目頭に水滴を貯める、

『分かったよ!病気が治ったら結婚してやるよ!』

『ほんとに!?!それなら頑張って病気治すね!』

先ほどまで貯めていた涙がいつのまにかなくなっている。

おそらく嘘泣きだったのだろう。

そんな事を思っているうちにいつもの夢が終わる感覚が近づいてきた。

あの二人はどうなるのだろう。

彰は夢の少年少女が他人ではないような気がしていた。

もしかしたらただの妄想かもしれない。

こんな恋があればいい程度のも物かもしれない。

ただ・・・

いつからか、あの少女を北沢と重ねるようになっていった。

第十八話 海 前編

ミーン、ミーン、ミーン

日々増してきたセミの鳴き声に彰は、目を覚ました。

まだ覚醒していない意識の中で時計を手にとり時刻を確認すると、

8時30分・・・

『・・・ふっ』

誰もいない部屋で時計に笑みを浮かべる。

そう、今はもう夏休みなのだ。

『さあ、エアコンの効いた部屋でのんびりするか!』

さっそく部屋の温度設定を十八度にし、冷蔵庫から飲み物を取りだした瞬間、

ピンポーン。

部屋に来訪者を告げる呼び鈴が鳴り響く。

いったい、だれだよ。

心の中で悪態をつきながらドアを開けると、

『おい、神内い早く海にいこうぜ』

・・・パタン

『閉めるなよ!』

『なんなんだよ、朝早くから?』

まだぼさぼさの頭を掻きながら桜井に言うと、不思議そうな顔をし、

『何ってんだよ?今日は北沢と俺と神内とあと暴力女とで、海に行

くっていったじゃねーか。』

真剣な顔で言い終えた桜井の後ろから感じて取れるほどの殺気を感じる。

『だれが暴力女よ!』

バシ!!

葵の必殺技とも言える手刀が桜井の首にふりそそぐが、前のように本気ではやっていないためか気絶はまではいたらず声も出さず、地

面を転げまわっていた。

そういえば、そんな約束したっけ・・・

よく考えもせずに約束をしてしまったことに自分のことながら怒りを覚えてしまった。

『あの一・・・』

そうこうしているうちに後ろから北沢がもうしなさげに出てきた。もうすでにメンツが揃っているのであれば、断ることもできないだろう。

『はあ・・・用意してくるからちよつとまっててくれよ』

夏休みの初日から予定が狂ってしまった。

しかし、どこか嬉しさもあり準備をする時間もそんなにかからないのであった。

無駄にかっこいい顔でこちらに語りかけてくる。

てゆうかいつの間に着替えたんだ？

そんな疑問をよそに着々と準備体操をすませていく。

『まあせっかくきたんだし入ろうよ』

『そうですね』

そう言つて女子の二人は更衣室へと歩いていった。

じゃあ俺も着替えにいくか。

そう思い辺りを見渡すが近くに更衣室があるようにも見えない。

『どこで着替えてきたんだ？』

『ん？海パンを履いてきたに決まってるだろ』

ふんぞり返っている男に疑問を投げかけてみる。

『じゃあパンツは持つてきたのか？』

『・・・あ！』

すでに半身海に浸かっている男に引き返すすべはない。

冷や汗をかく男とそいつを冷ややかな目で見る男。

女子二人がくるまで会話がなかったのはゆうまでもなかったのだった。

第十八話 海 前編（後書き）

長くなりそうだったので前編と後編に分けます。
意見や感想募集中でございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4743x/>

star history

2011年11月21日22時46分発行